

[成果情報名] シートマルチをした「青島温州」の隔年交互結実による中玉果生産法

[要約] シートマルチ栽培を行っても樹勢が強く大玉果となる「青島温州」は、隔年交互結実栽培により中玉果生産ができ高品質な果実となる。

[キーワード] 青島温州、隔年交互結実、中玉果、樹勢、マルチ栽培

[担当] 長崎果樹試・生産技術科

[連絡先] 電話 0957-55-8740、電子メール s00660@pref.nagasaki.lg.jp

[区分] 果樹

[分類] 指導

[背景・ねらい]

西南暖地で栽培される「青島温州」は、シートマルチ栽培しても枝の伸長が旺盛で樹勢が強く隔年結果性が大きい。着果が少ない場合は果実は極大果する。そこで、栽培が容易な春しょうおよび夏秋しょうを利用する栽培型での隔年交互結実による中玉果安定生産技術を組み立てる。

[成果の内容・特徴]

- 1．シートマルチ栽培における隔年交互結実は、隔年で高い着花量と新しょう量が確保される（表1）。
- 2．隔年交互結実は着果年の1樹当たり着果量が安定して多く確保され、高品質な中玉果実が生産される（表2、表3）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．隔年交互結実栽培を行うためには遊休年に樹勢強化を図っておく。
- 2．遊休年にはやや強めのせん定を行い、新しょう確保に努める。
- 3．隔年交互結実栽培へ誘導するためには、着果過多年の3～4月に夏秋しょうをせん除し新しょうの発生を促した上で、植物成長調節剤を活用し効率よく全摘果を行う。翌年から隔年に着果させる。
- 4．着果年の摘果は樹上選果程度の軽めの摘果が良いが、小玉果が予測される場合は必要に応じて摘果する。
- 5．遊休年の摘果は、着花（果）量が少なくなるため人力摘果でよい。

[具体的データ]

表1 隔年交互結実栽培と年次別の着花量、新しょう量

区 分	着花量(1 ~ 5)				新しょう量(1 ~ 3)			
	2001	2002	2003	2004	2001	2002	2003	2004
隔年交互結実・裏年着果	1.5	4.4	0.8	4.6	3.0	1.0	2.2	1.4
隔年交互結実・表年着果	2.8	2.4	4.4	1.0	2.5	2.4	1.6	2.8
無処理	1.8	2.4	1.6	4.6	2.8	2.6	2.4	1.4

○ は全国的に表年

表2 隔年交互結実栽培による年次別収量と一果平均重 (2001 ~ 2004)

処理方法	着果樹収量 (kg/樹)					変動係数	1果平均重 (g)			
	2001	2002	2003	2004	平均 (2001 ~ 2004)		2001	2002	2003	2004
隔年交互結実	65.0	65.2	93.6	80.9	76.2	18.6	128	84	117	133
無処理	45.4	58.6	28.1	78.8	52.7	40.6	158	103	166	132
有意性 ^z	ns	ns	*	ns	ns	-	ns	ns	**	ns

注) 収穫月日: 2001年12月4日、2002年12月4日、2003年12月1日、2004年12月8日
 変動係数^z (標準偏差 / 平均値) × 100

表3 隔年交互結実栽培と年次別果実糖度(L級果実)

処理方法	糖度 (brix)			
	2001	2002	2003	2004
隔年交互結実	12.6	13.6	12.0	13.1
無処理	-	14.7	14.2	12.2
有意性 ^z	-	**	**	**

^z **は1%水準で有意差有り

注) マルチ被覆日: 2001.7.31、2002.7.24、2003.8.6、2004.7.14

表4 隔年交互結実(着果年)の年次別果実階級別割合(2001 ~ 2004)

処 理	階級別割合 (%)					着果数 (個 / 樹)
	3 L	2 L	L	M	S	
2001年 隔年交互結実・着果年	10	28	24	22	16	511
無処理	27	37	18	12	6	287
2002年 隔年交互結実・着果年	1	4	5	17	73	780
無処理	2	16	12	24	46	571
2003年 隔年交互結実・着果年	3	9	37	28	23	798
無処理	50	24	20	4	2	169
2004年 隔年交互結実・着果年	9	14	31	38	8	609
無処理	6	14	42	31	7	597

[その他]

研究課題名 : 新資材・新栽培法による温州ミカンの品質向上技術の開発
 予算区分 : 県単
 研究期間 : 2004 ~ 2009年度
 研究担当者 : 古川 忠、林田誠剛